

描画体験の評価に関する尺度の作成の試み

目白大学心理カウンセリングセンター 土田 恭史
目白大学人間学部 田中 勝博
目白大学人間学部 今野 裕之
目白大学人間学部 丹 明彦
有明教育芸術短期大学子ども教育学科 赤坂 澄香

【要約】

本研究では、投影描画法を行なった後の描画体験における肯定的・否定的感情の強さを測定する尺度を作成し、その妥当性と信頼性について検討した。119名の大学生を対象に今と将来法を実施し、実施前後での感情の変化と本尺度との関連について調査を行なった。その結果、本尺度は、「理解促進」、「表現促進」、「直面・抵抗」の3因子からなり、いずれも十分な信頼性を示した。また、「理解促進」因子は描画後の肯定的感情の増加と有意な正の相関を示し、「直面・抵抗」因子は、否定的感情の増加と有意な正の相関を示した。さらに事例検討を行い、描画体験に応じた感情変化がみられたことから、十分な妥当性を備えた尺度であることが示された。

キーワード：描画体験評価尺度、描画法、今と将来法、自己理解、感情変化

問題と目的

私たちが絵を描く時には、さまざまな体験や感情が生じる。手に持った鉛筆の感触、筋緊張、画用紙に筆先が触れたときに指先から伝わる紙の感触、何を描こうか思案をし、時には思いつきで筆を走らせる、色を決め、塗る。塗りながら線や色を吟味しながら、イメージを形にしていく。出来上がった絵を見て、その中にいくばくかの自分の姿を認めることも少なくない。それは言葉にはし難い種々の記憶を垣間見ることもある。ふとした瞬間にまさにあのことであったかと思いつく体験をすることもあるし、忸怩たる思いが首をもたげることもある。このような言葉にならない体験が、しばしば自分を振り返り、そのあり様に気がついていくきっかけとなることは少なくない。

描画は、言語によって表出しづらい体験や考えを、絵という非言語的な表現チャンネルを用

いて表出し外在化することで、心理臨床的行為を促進する作用を持つ（藤中，2010）。しばしば心理臨床においてはクライアントの葛藤と出会う。多くの場合、葛藤に直面することはしばしば一人で行うには難しいものである。葛藤の緩和のためには、それにまつわる体験を探求し感じ取ることが有効であるが、それはクライアントに一定以上の水準を要求するものである。描画は、言葉ではなく絵の形でさしはさまれることによって、直接的な言語表現とは違う形で、自己イメージを外在化する。そして、描画について語ることによって、自己イメージをあらたなものとして語りなおすre-storing（小森・野村・野口，1999；浅野，2001；高橋・吉川，2001；野口，2006）プロセスを含んでいる。表出された自己イメージは、新たに体験された自己構造（Rogers, 1951, 1961；Kahn, 1997）として再帰的に自己に取り入れられることで

(Borgmann, 2002)、自己イメージに作用するのである。たとえばMcMurray & Schwartz-Mirman (2001) や、Reynolds & Prior (2003) は、がん患者らが描画表現を通じて、悪化の予防や新たなアイデンティティの再構築に寄与する事例を報告している。また、Gullemin (2004) は、心臓疾患を患う中年期女性を対象とした個別面接の中で、クライアントが自分自身の病気の状態の絵を描くことによって、病気が視覚化され、その理解や知識が身となっていくプロセスについて報告している。描画後に語られる感想の多くに、「自分のことが少し見えた」、「描いてみてスッキリした」、「やるが見えたら、少し楽になった」など、展望的な自己理解やカタルシスを得たというものが比較的多く見られる(土田・田中, 2011) のは、そのようなプロセスを伴うからであろう。

本邦の描画研究では、描画を描画テストとして洗練させ、精神病理的な問題や性格的な問題との関連や行動予測についての妥当性や信頼性を高めようとする、表現病理的観点によって、これまでも多くの研究がなされてきた。その意義は十分に認められるものである。しかし、これをクライアントとのかかわりの中でより有効に用い、クライアントの自己理解や内的体験を促進するとともに、セラピストの側のクライアント理解を促進するための工夫が必要となっていることもまた事実であり(藤中, 2010)、とくにクライアントが描画を通じて体験する過程についての研究が注目されてきている。

これまで、クライアントに生じた描画体験については、インタビューあるいは推測的に検討されることが中心であった。臨床場面においては、描画がクライアントにどのように捉えられたかについて、主として言語報告に頼ることが多い。その中で藤中(2008)はバウムテストを通じて自己理解や自己受容が深まった例を挙げ、その一方で、そのような内的過程が促進されにくかったケースは、描画行動と自分の日常の行動を関連させて考察できなかった場合に多いことを指摘し、バウムを通じた自己理解には、自分自身の体験に触れることが必要であることを指摘している。すなわち、体験過程に注目し、描画体験の強さを捉える事は、クライエ

ントの表現における訴えを理解し、取り扱うためのひとつの助けになりうるといえよう。近年の研究においても、カウンセリング効果、あるいは教育的効果における体験の影響について検討するものが増えてきている(大塚, 2008; 桜本, 2009; 高山, 2011)。これは、カウンセリングにおけるかかわりや介入を検討する上で、クライアントが「それをどのように体験したか」、「どの程度の強さ(弱さ)のものとして体験したか」といった要素を抜きに考えることが難しいことを意味している。これは投影描画法においても同様で、このようなクライアント側の主観的評価は、描画後のクライアントの評価や反応、および描画後質問(Post Drawing Interview: PDI、以下、PDI)で得られる語りの意義や意味について理解する一助となることが期待されるが、これまで事例研究以外ではあまり検討されてこなかった。

そこで、本研究は描画体験の強さのスケールを作成し、その信頼性と妥当性について検討を行う。描画体験に関する尺度の妥当性の検討については、自己変容体験は多くの場合、情緒的变化を伴うことが多いことに着目し(飯塚1973; 永石, 2004; 石橋・川上・樋泉, 2008; 門前, 2009; 鶴飼他, 2010)、描画前後の感情変化と体験との関連を指標として検討する。

方 法

1 対象

4年制大学の1年生対象の投影描画法に関する授業に出席した大学生、男女119名。

2 使用した描画法

今と将来法。Storch & Remocker (1983)によって考案された描画法であり、一つの画用紙を縦に2分割し、左側に「現在の状態」を、次に右側に「将来の望ましい状況」を描かせる課題画。自由画とは異なり、描く対象、描く内容がある程度定まっており、構成的に自己の現在と将来イメージを視覚化し、そこに至るための方略を考える一助とすることを目的とした技法。自由画よりも取り組みやすいこと、青年期的課題と結びつきやすく描出されやすいことから、本技法を選択した。

3 使用した尺度

(1) 感情気分評定20 (福島ら, 2005): 20の感情の形容詞対からなるSD法の尺度。嬉しい、楽しい、といった10項目からなる肯定的感情因子と、もやもや、気が重いなど10項目からなる否定的感情因子の2因子20項目の尺度である。

(2) 描画体験尺度 福島ら (福島ら, 2005・2007) のカウンセリング体験尺度を元に、これを描画実施にあたって文面を改め、項目を追加したもの。描画後の体感や自己表現の度合い、負担感などを尋ねる。改訂にあたっては2名の臨床心理士による討議を行い17項目とした。

4 調査手続

集団法にて実施。授業中に調査の主旨、および協力の自由の保証など倫理事項を伝えた上で、描画用紙と質問紙が閉じられた冊子を配布。作業は各自が机上にて一人で実施した。冊子は、①実施前の感情状態、②現在の描画と将来の描画を描く用紙 (見開きA3) と各描画の下部に絵の説明を記入する欄を設けたもの、③描画後の感情状態と作成した描画体験尺度の順で構成されたものである。

なお、②の描画用紙の構成について説明する。まず、用紙はA3のものを用いた。この左側半分には現在の自分を書くための枠 (縦15cm×横18cm程度) を、右側半分には将来の自分を書くための同じ枠をあらかじめ印刷しておく、そこに描画を求めた。左右の枠の下にはPDI項目が書いてあり、描画後にそれに自由記述で絵の説明を求めた。PDI項目は①「これは、あなたの現在のどのような状態を描いたものですか」、②「これはあなたに近い感じですか、あるいは遠い感じですか」、③「この絵に似合うのはどのような天候だと思いますか」、④「この絵に風は吹いていますか? 吹いているとしたらどちら向きですか」、⑤「この絵の中で、足りないものや必要そうなものはありますか」、⑥「この絵を見て、何か感じることや連想することがありますか」、の6項目で、現在、将来のそれぞれについて記入してもらった。そして次ページに「あなたの描いた絵について教えてください」と教示があり、2枚の絵についてのPDIと

して、①「現在の状態が将来の状態に変わるために必要な事はどんなことだと思いますか」、②「そのために、誰かの援助や何か必要なものがあるとしたら、どのようなものだと思いますか」、③「また、その可能性は、何パーセントくらいだと思いますか」、④「この絵を描いてみての感想を教えてください」の4項目について、同様に自由記述にて回答を求めた。

5 調査期間

2011年6月

結果

調査協力者のうち、欠損値の見られたサンプルを除外した結果、対象者は男性36名、女性76名で、計112名。全体の平均年齢はM=18.87、SD=1.45であった。

1 描画体験尺度の構成と信頼性および妥当性の検討

まず、作成した描画体験尺度の因子分析を行った。結果をTable 1に示す。第1因子は「自分のよい面に気づいた」、「エネルギーをもらった」「今まで見えていなかった自分に気づいた」など、自分の新たな側面の気づきや、考えや自己イメージの再確認など、自己発見的なプロセスの体験に関する項目と考えられ、「発見促進」因子とした。信頼性係数 $\alpha = .816$ であった。次に第2因子は、「現在の自分の思いを表せた」「自分を表現することができてよかった」など、表現表出に関する項目群と考えられたため、「表現促進」因子とした。信頼性係数 $\alpha = .794$ であった。第3因子は、「自分に向き合うことに抵抗を感じた」「自分を表現するのにためらいがあった」「今まで先送りにしてきた問題を直視せざるを得なくなった」など、自分の見づらかった側面への気づきや、描くことに対する抵抗感など、直面・抵抗に関する項目群と考えられたため、「直面・抵抗」因子と名づけた。信頼性係数 $\alpha = .705$ であった。やや第3因子の α 係数が低いのが、各因子とも十分高い信頼性を示した。なお、各因子の平均点はTable 2の通りである。

Table 1 因子分析結果

	発見促進	表現促進	直面・抵抗
9. 自分の良い面に気づいた。	.72		
2. エネルギーをもらった。	.67		
1. 今まで見えていなかった自分に気づいた。	.64		
17. 自分の新しい面を発見した。	.62		
10. 自分の考えがはっきりしてきた。	.59	.38	
5. 自分の好きなもの・興味・関心がはっきりしてきた。	.51		
12. 現在の自分の思いを表せた。		.74	
13. 自分を表現することができて良かった。	.38	.71	
6. 自分を振り返ったり、見つめ直したりすることができた。		.59	
4. 自然な感じで自分の気持ちが出てくるような感じがした。	.37	.49	
15. 自分に向き合うことに抵抗を感じた。			.69
7. 自分を表現するのにためらいがあった。			.63
11. 今まで先送りにしてきた問題を直視せざるを得なくなった。		.42	.55
16. やってみて自分を反省した。		.43	.54
3. 傷つく体験をした。			.43
寄与率	28.37	12.37	6.75
累積	47.49		
α	.817	.794	.740

Table 2 各因子の平均得点と標準偏差

	平均値	標準偏差
発見促進	16.32	5.042
表現促進	14.12	3.707
直面・抵抗	10.55	3.192

次に体験尺度の妥当性について検討するため、描画実施前、実施後の感情評定20の得点の描画実施前後の差をもとめ、各因子との相関について検討した。なお、この差分は、得点が正の方向に大きい値をとれば、実施前よりも得点が高くなったことを意味し、負を示せば実施前に比べて得点小さくなったことを意味する。まず、感情評定20の描画前後での変化をTable 3に示した。「今と将来法」描画の前後では、描画後に肯定的感情が若干増加し、否定的感情が若干低下するようである。なお、平均得点からは大きな感情変動は見られにくいですが、標準偏差

が大きく、個人のばらつきが大きいことがうかがわれた。次に体験尺度と感情状態の変化について相関係数を算出した。まず、描画体験尺度の各因子は、相互に有意な弱い～中程度の正の相関を示した。また、感情状態の変化との関連について検討したところ、肯定的感情の変化と発見促進因子の間に、有意な弱い正の相関が見られた ($r=.302, p<.01$)。また、否定的感情の変化と直面・抵抗因子との間に有意な正の相関が見られた ($r=.235, p<.01$)。

Table 3 感情評定の得点変化の平均

	PRE		POST		変化量	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
肯定感情	37.16	11.60	38.25	13.56	1.48	11.74
否定感情	25.29	11.23	24.99	12.01	-0.97	9.70

Table 4 描画体験尺度と感情状態20の相関係数

	発見促進	表現促進	直面抵抗	肯定変化	否定変化
発見促進					
表現促進	.546**				
直面抵抗	.518**	.322**			
肯定変化	.302**	.166			
否定変化	.046	.102	.285**	-.155	

2 事例

これらの結果に基づいて、理解促進、表現促進、直面・抵抗因子の得点がそれぞれ高かった事例について紹介したい。

(1) 18歳女性 理解促進 (Fig.1)

様々な顔が並存していたものがひとつの顔に統合されるが、背景が淡色ではなく複数の色でまとめられており、幅広さを持ったイメージである。PDIによると、現在の絵は「いろいろな色や顔をもっている。やりたいことがたくさんあってはっきりしない。喜怒哀楽が激しい」状態を描いたもので、イメージとしては近い。ずっと晴れているのに、いきなり雨が降ったりするような天気似合うといい、風は上から下に吹き降ろしている。描画上ではいくつもの表情が描かれているにもかかわらず、足りないものは「いろいろな感情をもった表情」と述べる。描画を見て「もやもやしている」と感想を述べた。これに対して将来の絵は「自分のやりたいことがはっきりして、自分の好きないろいろなことをこなしている」状態だといい、近いイメージとして捉えられている。天気は快晴で風は吹いていない、足りないものはない理想的なイメージのようだ。この絵に対して「楽しそうで、

充実している」と述べている。現在が将来のイメージの状態になるためには、自分の気持ちを整理して、何がしたいのかを明確にすることが必要なのだろうといい、それに助けになる人や物についてたずねると、「誰かに頼っても、最後に決めるのは自分なので、決断力だと思います」と述べる。それが実現する可能性については「100%!! 絶対将来の姿に近づいてみせます!!」と強く語り、全体の感想では「もやもやすることが多かったけれど、将来の姿を書いてみることによって、まだまだこれからだし、今はたくさん悩んでもいいのだと思いました」と、現在の自分を受け入れることについての言及が見られた。体験尺度の得点分布は、理解促進と表現促進高く、直面・抵抗は平均的である。感情状態は肯定的感情が14ポイント高まり、否定的感情も5ポイント高まっているが、現在の自分と向き合うことによって肯定的否定的感情がともに高まったが、全体的には理解促進的な体験として受け止められている。

(2) 18歳女性 理解促進・表現促進・直面・抵抗がいずれも高い (Fig.2)

理解促進、表現促進、直面抵抗が対象者の中でもっとも高かった描画である。現在、将来と

も明るい陽性イメージで描かれた絵で、土田・田中（2011）の分類によるとPP型のレアな描出反応である。PDIでは「ものすごく難しかった課題が終わった達成感!! を描きました!」と語り、これはイメージとしては近いというよりもまさに今の気分だという。天気は快晴だが、入道雲もモクモクいるといい、心地よいそよ風が吹いている。足りないものはなく、「着のみ着のまま! 足りないものは何もありません」といい、感想として「海の見える、景色の良いところへ行きたい」と述べている。これに対し将来イメージは「仲間とスカイダイビングで自分のすべてを投げ出す」場面を描いている。実際には、「スカイダイビングの予定はない」ので、イメージとしては遠いかもしれない。天気は晴れでスカイダイビング日和、風は「メッチャ吹いている」。この絵に足りないものは何かとたずねると、「パラシュート忘れた!! でも飛んでいる今を楽しんでいる」と語られ、パラシュートもなく身一つで身を投げ出し、実は落下している様子が語られた。感想では「空飛びたい。夢」と述べている。これはもちろん比喩的な表現で、現在が将来になるために必要なことは「自分を前面に出すこと! 人見知りをなくすこと!」だといい、描画とはうらはらの現実が垣間見える。助けになるのは「友達をいっぱい作る! 今を楽しむ」ことであり、実現の可能性は「87%」と高い。描画後に「今の気持ちを絵にしてみたらすがすがしくなりました」と語る。manicな絵で、強い願望が外在化され、描画と対照的な現実の自分の「人見知り」に直面するが、一方でこのようになりたい自分を描くことで、自分の気持ちを確認する。描画後の感想としてはすっきりしたと語るが、描画前後での感情状態の変化は肯定的感情と否定的感情がともに若干低下していた。陽性の語りのなかに陰性のイメージが同居する絵であり、体験尺度得点のプロフィールと符合するものと考えられた。

(3) 18歳 女性 直面・抵抗、表現促進が高く、理解促進が低いパターン 〈Fig.3〉

暗色を背景に頭の上に渦巻きの出ているキリンが描かれた後、暖色のピンクと太陽を背景にしたキリンが描かれている絵である。PDIによ

ると、現在は「もやっとしている感じ」を描いたもので、イメージとしては近い。天気は曇りで風は吹いていない。足りないものは特に「ない」と語り、絵を見て、「迷ってる」と述べる。これに対して将来の絵は、「明るい」絵だとし、イメージとしては遠い。天気は晴れで、風が左から右に少し吹き始める。足りないものは「なし」。最後に、「こうなりたい」と語る。現在が将来になるためには「みる、きく、話す、ごかいをとく（原文ママ）」と語るが、その助けになるものについては「わかんない」と対処について思いあぐねている様子がかがわれる。そのためか、「もやっとしたのが増えた。なんか現実と向き合ったかんじ。すっきりしたくなった」と語った。体験尺度得点は、理解促進が平均以下、表現促進が平均よりやや高く、直面・抵抗は平均よりも高かった。感情状態20の得点変化は、否定的感情得点が高まっており、理解促進的な体験に乏しく、直面・抵抗表現が促進された様子がかがわれ、それに伴って否定的感情体験を強くしたものと考えられた。

考 察

1 尺度の妥当性と信頼性について

本研究では、投影描画法に伴う描画体験の強さを測定する尺度の妥当性と信頼性について検討した。その結果、作成した尺度は「発見促進」「表現促進」「直面・抵抗」の3因子に分かれた。いずれの因子も α 係数は0.7~0.8の間にあり、十分な信頼性が認められるものであった。また、各因子は相互に正の相関が見られ、描画体験において発見促進的なプロセスや、表現促進的なプロセス、直面抵抗などは必ずしも相反するのではなく、共に生じうるものであることがうかがわれた。自己理解が深まるのは何も自己の肯定的な側面に対する気づきによってのみ生じるものではない。否定的な側面や、見たくない面に気がつくこともまた自己理解の一つといえる。その意味で3因子が相互に相関することは、発見促進的な描画体験は、表現が促進されたら体験するとともに、自分のいやなところに直面したり、そのような予期から抵抗感を抱いたりすることを示唆していると考えられ、尺度の内容に照らしても妥当な結果といえるだろう。

う。描画を通じての自己理解が促進的であるほど、否定的な側面に出会うことも多くなることがここからうかがわれる。そして、臨床においては、否定的な描画体験もまたひとつの描画体験であるとともに、自己理解を含んだものであると考えることが、臨床上必要でもあるだろう。

次に感情評定との関連では、発見促進自体は肯定変化と正の相関がみられた。発見促進的な描画体験が得られることで、肯定感情の増加と関連するようだ。無論これは絵を描くことによって得られるカタルシス効果が関与する部分もあるだろうが、表現促進と感情状態の変化に相関が見られなかったこととあわせて考えれば、ただ描くだけでは、このような感情は得られるわけではなく、描いたことによって自分自身についての何らかの気づきや考えが得られることが、肯定的感情の高まりに繋がると考えられた。(森・福島, 2008)によると、自己との内的対話の後に認知的変容が促進されると、肯定的感情の上昇が見られることが報告されており、本研究においても同様のプロセスが見られたと考えられた。

一方、直面抵抗と否定的感情は有意な正の相関関係にあり、直面抵抗感を強く体験すると、描画体験後の否定的感情が高まることがうかがわれた。直面抵抗も描画体験を構成する重要な要素であることは間違いないが、特に今回のような集団形式の調査でともなれば、自分のいやな面に直面することや、そうなるかもしれないと感じることは充分ありうる。また、自己発見のプロセスがないまま描画を終わることによって、疲労感や負担感が生じることもあるだろう。その意味では妥当な結果といえると考えられた。

以上のことから、本描画体験尺度は描画体験の3つの側面に焦点を当てた尺度であることがわかった。そして、これらの3つの側面は相関しており、描画体験における促進的な側面と抵抗抑制的な側面は必ずしも相反するものではないことがうかがえた。また、気分・感情の変化の観点からすると、自己発見的な体験を強くした場合は、描画後の肯定的感情が高まるが、抵抗感や負担感が強いと陰性感情が強まることが

多いことがわかった。また、このような結果は一般的に考えてもきわめて順当な結果と考えられ、本尺度の妥当性と信頼性が示されたと考えられた。

2 事例を通じての本尺度の検討

描画は描くことで感情表出（あるいは発散）を促進するためのツールではなく、情緒的体験を捉え、その体験を促進し、その意味について考える作業をクライアントに求める。セラピストとの間で取り交わされる描画表現とその語りは「感情と知性と身体との間の橋渡しをするもの(岩壁, 2011)」である。クライアントが体験する描画は、事例にも見られるようにさまざまであり、そこから得られる自己イメージの評価も肯定的なものばかりとは言えず、否定的な評価に結びつくことも少なくない。われわれの別の調査においても、今と将来法を行った対象の全体の約1/4が描画体験に伴う抵抗感や不全感を感じる事が示唆されている(土田・田中, 2011)。しかし否定的な描画表現は、決して珍しいものではなく(Machover, 1949)、自己を現実的、批判的に検討できていることの表れと考えることができる。むしろ否定的描画表現を描けない場合のほうがまれな反応であり、適度な否定的表現はむしろ健康的な反応と考えられるものも少なくない(Wadson & Carpenter 1976; 土田・田中, 2011)。

たとえば今回用いた、今と将来法では、事例1のように、陰性イメージから陽性イメージに転換される絵が多く描かれるものが多い(土田・田中, 2011)。未来志向的であり、対処イメージのはっきりとしたイメージを持つものが多い。陽性の感情体験に続いて起こる注意力の覚醒や認知的広がりによって、新たな理解や洞察に達したり、それまでの行き詰った見方から開放される(Fitzpatrick & Stalikes, 2008)との指摘は示唆的で、今回の調査においても、事例1や2のような陽性感情体験とともに理解促進体験をしたものは、対処の展望をもった未来志向的な描画を描いていた。絵を描くことは、ただ話をするだけよりも言語報告を促進し、特に自己の情緒体験を言語化するとばくちとなる(Gross, J. & Hayne, H., 1998)。それだけでなく。

描画を通じて情緒体験を語ることは、自分の情緒体験を言語化する力を育む働きをする。しかし中には事例3のように、対処についての展望が得られず、言葉少なに絵について語り（語れず）、むしろ陰性の感情を強める結果になる場合も見られることがある点については留意すべきである。

3 本尺度の利用と今後の課題

描画はクライアントとセラピストとの「やりとり」（志村, 1990）であり、単なるクライアントの自己投影ではない。「単独にケースによって作られるのではなくて、面接者との（ないしは治療構造に影響を受けやすい）合作（志村, 1994）」である。治療者は描画とは独立した存在ではなく、投影描画法における描画とはセラピストとクライアントの相互作用を踏まえて描かれた投射物である。それだけにクライアントの描画体験に対する評価や語りは、治療構造ないしはセラピストとの治療関係に対するクライアントの意図的・無意図的な考えを反映したものであると考えられる。本尺度は描画体験についてたずねるもの形をとっているが、これは、直接的にセラピスト・クライアント関係に言及することなく、治療関係を評価する尺度にもなりうるのではないか。また、客観的な尺度を用いてスケール評価させることは、セラピスト側の理解にとどまらず、クライアント自身が描画を通じて感じた体験と自分の感情を定位し意義付けることを促進すると考えられ、セラピストとクライアントが尺度の結果について話し合うことで、投影描画表現の理解を補うツールともなりうるものが期待される。今回の調査は尺度作成の研究であったこと、また集団法によって実施したものであることから、上記のような検討はできなかった。そのため、個別場面についての本尺度の有効性について改めて検討する必要がある。また臨床場面でもより使いやすくするためのデータの蓄積や、実施のタイミングについてなどについても引き続いて検討するべく、事例などを積み重ね、集団場面および個別場面での標準化を進めていきたい。

付記

本研究は平成22年度の目白大学特別研究費の助成を受けて行われた。

謝辞

本研究について、調査に協力してくれた本学心理カウンセリング学科の絵画療法の講座を受講した学生諸君に感謝する。また、描画反応の取り込みおよびデータ整理やデータ入力に協力してくれた本学心理学研究科臨床心理学専攻修士課程の瀬端末弓さんと丹波洋子さんの各位に心より感謝したい。

【引用文献】

- 浅野智彦（2001）. 自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ 勁草書房
- Borgmann, E. (2002). Art therapy with three women diagnosed with cancer. *Arts psychotherapy*, 29, 245-251.
- 藤中隆久（2008）. バウムテストを使用した二つの事例研究, 心理臨床学研究, 26, 184-192.
- 藤中隆久（2010）. バウムテストを利用して自己理解のための体験探索を促進する方法. 心理臨床学研究, 28, 303-312.
- 福島脩美, 高橋由利子, 松本千恵, 土田恭史, 中村幸世（2005）. カウンセリング研修における話し手・聴き手演習の効果に関する研究. 目白大学心理学研究, 1, 1-12.
- 福島脩美, 土田恭史, 森 美保子, 松本千恵, 鈴木明美（2007）. カウンセリング研修プログラムにおける個別方式, 集団方式, および想定書簡の効果, 目白大学心理学研究, 3, 63-75.
- Gross, J. & Hayne, H. (1998). Drawing facilitates children's verbal reports of emotionally laden events. *Journal of Experimental Psychology*, 4, 163-179.
- Gullemin, M. (2004). Embodying heart disease through drawings. *Health (London)* 8, 223-229.
- 飯塚銀次（1973）. 人間探求と創造性の開発. 高陵社
- 石橋通江, 川上晴実, 樋原幸子（2008）. 精神看護学演習におけるサイコドラマの教育的効果：ドラマ体験に見られた感情と気づきの形成. 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report, 6, 49-57.
- 岩壁 茂（2011）. 感情と体験の心理療法 12 陽性感情と心理的変容. 臨床心理学, 11, 84-92.

- Kahn, M. (1997). *Between therapist and client: the new relationship*. Rev.ed. W.H.Freeman and Company. (カーン.M. 園田雅代(訳)(2000). セラピストとクライアント—フロイト, ロジャース, ギル, コフォートの統合 誠信書房)
- 小森康永, 野村直樹, 野口裕二 (1999). ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社
- Machover, K. (1949). *Personality Projection in the Drawing of Human Figure*. C.C. Thomas, U.S.A. (深田尚彦(訳)(1998). 人物画への性格投影 黎明書房 pp.12-23.)
- McMurray, M., Schwartz-Mirman, O. (2001). *Integration and working through in art therapy*. *Arts Psychotherapy*, **28**, 311-318.
- 門前豊志子 (2010). カウンセリングに導入したイメージ体験の変化過程における分析(1):MYASによるイメージ内容の語彙の質的分析を中心に. 駒沢女子大学研究紀要, **17**, 287-298.
- 森 美保子, 福島 脩美 (2008). 自己対面法によるライフレビューが高齢者に与える影響. 目白大学心理学研究, **4**, 85-99.
- 永石 喜代子 (2004). プロセスレコード演習における自己理解の効果. 鈴鹿国際大学短期大学部紀要, **24**, 51-62.
- 野口 薫 (2006). ナラティブと描画. 臨床描画研究, **21**, 6-12.
- 大塚 尚 (2008). 二者関係における関係性形成過程とその体験の様相について. カウンセリング研究, **41**, 34-43.
- Remocker, A.J. & Storch, E.T. (1983). *Gesto come parola. Manuale di tecniche non verbali per terapie di gruppo*. deastore.com, Roma. (篠田峯子(訳)1994 身ぶりで語ろう—適応・時間別54の治療ゲーム集— 協同医書出版社.)
- Reynolds, F., Prior, S. (2003). A life-style coat-hanger: a phenomenological study of the meanings of artwork for woman coping with chronic illness and disability. *Disability Rehabilitation*, **25**, 785-794.
- Rogers, C.R. (1951). *A Therapy of Personality and Behavior. Client Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston: Houghton Mifflin. 481-543. (伊藤 博(編訳)(1967). パースナリティと行動についての一理論 ロージャズ全集第8巻 岩崎学術出版社 pp.89-162)
- Rogers, C.R. (1961). The Process Equation of Psychotherapy. *American Journal of Psychotherapy*, **15**, 27-45. (伊藤 博(編訳)(1966). サイコセラピーの過程方程式 ロージャズ全集第4巻 岩崎学術出版社 pp.247-279.)
- 桜本洋樹 (2009). 心理面接における沈黙の一研究—体験過程スケールを用いた試行カウンセリングの分析を通じて. カウンセリング研究, **42**, 155-164.
- 志村実生 (1990). 連句を介したそれぞれの一人旅. 俳句・連句療法, 徳田良仁監修, 創元社. pp.335.
- 志村実生 (1994). 描画を通じたクライアントの訴えの質と扱いについて. 臨床描画研究, **IX**, 116-130.
- Stalikas, A., Fitzpatrick, MR. (2008). Positive emotions in psychotherapy theory, research and practice: New kid on the block? *Journal of psychotherapy Integration*, **18**, 155-166.
- 高山由貴 (2011). クライエントの主観的体験に関するプロセス研究—試行カウンセリングにおける話の深まりに注目して. 臨床心理学, **11**, 225-235.
- 高橋規子・吉川 悟 (2001). ナラティブ・セラピー入門. 金剛出版
- 土田恭史・田中勝博 (2011). 今と将来法における反応パターンと同一性および自我機能の関連. 日本描画テスト・描画療法学会第21回大会抄録集 pp.44.
- 鶴養啓子, 藤崎春代, 鳥谷まき子, 渡邊佳明, 山崎洋史, 松永しのぶ, 田中奈緒子, 木村あやの (2010). 試行カウンセリング実習の可能性と考慮点の実証的検討1-体験についての予備調査. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **12**, 1-12.
- Wadson, H. & Carpenter, W. T. Jr. (1976). Subjective experience of schizophrenia. *Schizophrenia Bulletin*, **2**, 302-318.

Study of validity and reliability of an evaluation scale for self-understanding experience after projective drawing technique

Takashi Tsuchida	Psychological Counseling Center, Mejiro University
Masahiro Tanaka	Faculty of Human Sciences, Mejiro University
Hiroyuki Konno	Faculty of Human Sciences, Mejiro University
Akihiko Tan	Faculty of Human Sciences, Mejiro University
Sumika Akasaka	Department of Childhood Education, College of Education and the Arts

Mejiro Journal of Psychology, 2012 vol.8

【Abstract】

In this study, we examined the validity and reliability of an evaluation scale for self-understanding experience after projective drawing technique. To explore the relation between self-understanding experience and emotional changes on pre and post drawing, a survey was conducted to 119 university students using of “self on now and future drawing technique”. The result of this scale was structured of 3 factors such as “facilitating self-understanding”, “accelerating the expression” and “confrontation /resistance”. The significant correlation was seen between “facilitating self-understanding” and change of positive emotions, and also “confrontation/resistance” and change of negative emotions. Furthermore, changes of emotions in this study were observed according to the aspects of the self-understanding experience after drawing. This could be suggested that this scale had sufficient validity and reliability.

keywords : an evaluation scale for self-understanding experience on drawing technique, projective drawing technique, self on now and future drawing technique, self-understanding, emotional changes



Fig. 1 18歳女性 理解促進



Fig. 2 18歳女性 理解促進 表現促進 直面抵抗がいずれも高い



Fig. 3 18歳女性 直面・抵抗、表現促進が高く、理解促進が低いパターン